

# AR CA DIA

54  
AUTUMN 2012

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽 五人の姿かたちを描く④

館長 榊原悟

(承前)これがその男である(図1)。果たして読者は見つけることができたであろうか。横たわる釈尊の頭部側、画面左端、沙羅双樹の傍らにこの男がいるはずだ。気が付いてしまえば、鮮やかな緑色の着衣が目立つ。

しかし読者は、その姿を求めて画面をくまなく眺め入ったに違いない。その際、画面手前、動物たちの姿に眼が釘付けになった方も少なくないだろう。嘆き悲しむ動物の描写が、それ程に秀逸であるからだ。が、さらにそうした動物たちの姿の内に、この『大涅槃図』の特質や特殊性を知るための鍵が、隠されているように思えてならない。そこではそれはこれらの動物たちを見ておこう。それが緑衣の男の謎に逼ることにも繋がるはずだからである。

伏し目がちに頭を垂れる獅子、天を仰ぐ白象、そして声高く鳴く牛。駱駝は静かに目を閉じ、馬も沈痛の趣で頭を下げる。虎は、京都正伝寺の、あの伊藤若冲も写した明代絵画『猛虎図』を下敷きにしたことは間違いない。ただし正伝寺本の猛虎が右前脚の肉球を、大きく目を見開いて舐めているのに対し、『大涅槃図』の虎は、前脚を舐める姿に曖昧さを残すこと(肉球を描かないのは等伯の写し崩れだろう)、目を細める点が異なる。その後ろで身を振り、空に向けて吼える豹(当時豹は虎の雌と信じられていた)の姿と共に、これで悲しみの表情を表したつもりなのだろう。

そう云えば猿の姿も面白い。等伯の猿となれば、牧谿描くところの、所謂牧谿猿<sup>もくせきざる</sup> || 手長猿<sup>てながざる</sup>というのが定番だろうが、ここでは顔の赤い獼猴<sup>びこう</sup> || 日本猿が描かれている。その猿が手の平で顔を拭う。頬を流れる涙をふいているのだ。むろん猿がそんなことをするはずもない。

いや、猿だけではない。獅子も白象も、駱駝も牛も虎、豹も、ここに登場する総ての動物たちが、いくら悲しいからと云ってこんな姿態、表情をとるわけもない。と云うより、そもそも動物たちが、わたしたち人間と同等等質の悲しみの感情を抱くものなのか、それさえ疑問だろう。

とは云え「涅槃図」である。そうである限り、釈尊の死を悼み、嘆き悲しむ動物たち

の姿を描かねばならない。言うまでもなく「涅槃図」の典拠となった『大般涅槃経』や『涅槃講式』に、そう説かれているからである。しかし平安時代の「涅槃図」では、かの応徳『涅槃図』(応徳三年一〇八六 金剛峯寺蔵)はじめて動物は獅子のみを描いたものや、奈良の達磨寺本のように動物を一切描かない「涅槃図」もあった。だが同じ平安時代の作品でも、京都国立博物館本『釈迦金棺出現図』などでは複数の動物が登場、以後動物たちは、典拠の経典に説かれていないものまでも取り上げられ、さらに鎌倉時代になると、その種類も一段と増加、かつ宋画の影響から描写も具体的に下っていく(中野玄三『涅槃図』『日本の美術』二六八号 一九八八年)。つまり時代が下れば、取り上げる動物は、それぞれの「涅槃図」個別の問題とみられ、何を描くかは絵師や、その「涅槃図」の寄進者(注文主)の宰領に委ねられていたとみてよいだろう。本法寺の『大涅槃図』でも、そうであったはずだ。しかもそうして選ばれた多くの動物を、尊師の死を悼み悲しんでいる姿に描かねばならない。動物たちが悲しむはずもないのに、である。

そこで「涅槃図」の絵師たちが採った方法は、彼らの姿を、人間の悲しみの姿になぞらえて描くことであつた。悲しみの擬人化表現と言つてよいだろう。そうすることによつて、初めて描かれた動物たちの姿に感情移入することができる。彼らも釈尊の死を悲しんでいるのだ、と。本法寺の『大涅槃図』の動物を描くに当つて等伯が採用したのも、むろんこの方法だ。そして等伯は、見事な感情表現を達成した。ここに描かれた動物たちの悲しみの姿に、わたしたちの眼も寄り添い、共感できるからである。

もちろん、それを可能にさせたのは、等伯の画技の高さである。加えて先行する「涅槃図」からの影響も無視できない。図様、構成など京の三大「涅槃図」の一つ東福寺本との類似がすでに指摘されている(赤澤英二著『涅槃図の図像学』 中央公論美術出版 二〇二年)。少なくとも本法寺本が、東福寺本系に連なる一本であることは間違いないだろう。つまり等伯は、先行する「涅槃図」の動物たちの図様を学習しつつ、より効果的な悲し(あの動物表現の実現を目論んだ、とみてよいだろう)。

ところが、その『大涅槃図』には、そうして描かれた動物たちと、どうにもそぐわない動物がいた。コリー犬のように鼻先のとがった洋犬である(図2)。その存在に気が付いた方はいただろうか。小さく描かれているので或いは見過ごされたかも知れない。しかしその位置は、画面最下段中央、結構目立つ場所である。

その洋犬の何が他とそんなに異なるのか。しかし、それについて述べる前に、あらかじめ確認して置きたいことがある。それは「涅槃図」に描かれた動物たちが、おおむね次の特徴を持つ点である。

・まず何を描いても釈尊の死を嘆き悲しむ表情ないしはポーズを取っていること、である。獣たちには比較的容易に、それができる。

・しかし、そうした表現が難しい、例えば鳥などの場合には、彼らに画面上部中央、すなわち横たわる釈尊を見つめさせることである。これが、そうした動物たちの哀悼の「かたち」であった。

翻つて洋犬ではどうか。とても嘆き悲しんでいる風には見えない。伏せた目、遠くを見る潤んだ目、そこに哀悼の気持ちが表示されていると見えないこともないが、やはり無理だろう。釈尊の方に視線を向けているわけでもない。目を閉じた犬のふさふさした尻尾に至っては、飼い主に対して振っている、そのようにも見えないではないか。それにこの二匹の姿態は、何より画面のこちら側、すなわち鑑賞者と、これを描いた絵師の視線に応えたポーズと言わざるを得ない(その意味で、ふた瘤駱駝の後ろ、釈尊に背を向け、こちらを見つめる可愛い鼻の姿も気にかかる)。要するに画面の中の釈

迦の死に向かい合う動物になっていないのである。これが二匹の洋犬に違和感を持つ最大の所以である。加えてもう一点、見逃してはならないのは、「涅槃図」にこうした洋犬を描くのは、それこそ後にも先にも先にもと言いたいところだが、少なくとも前例が全くない点である。その意味で本図の特殊性を知る鍵は、二匹の洋犬の存在に尽きる。その洋犬を描くことに決めたのは、むろん等伯自身である。絵師であり寄進者でもあったのは等伯その人、彼の意志が画面の隅々、モチーフ選択にまで及んでいたことは疑いないからである。では等伯はどうしてそこまで洋犬にこだわったのか。

それにしても「涅槃図」にまで洋犬を登場させるとは、驚き以外の何もの



図1



図2

でもないが、いかにも桃山時代らしい。云うまでもなくこの時代、ポルトガルとの南蛮交易によって洋犬がもたらされたことは、その交易の様子を描いた「南蛮屏風」の内に、精悍な大型犬がしばしば登場することからも明らかだろう(例えばサントリー美術館本)。等伯の時代からほぼ三、四十年後の二六四四年六月十六日、その肖像画に子犬(洋犬だろう)を描かせるなど愛犬家とみられる筑前の大守黒田忠之(二六〇二〜五四)は、前年に購入した大型犬の代金をオランダ商館に支払い、結局その犬は將軍家光に献上されたという(『長崎オランダ商館の日記』同日の条)。このことから、当時、間違いなく洋犬が持ち込まれ飼育されていたこと、その犬は將軍への献上品に用いても恥ない程に貴重(高価)であったこと、などが分かる。等伯の時代にはさらに珍重されていたに違いない。その洋犬を『大涅槃図』に描いてみせたのである。

しかも、その描く筆致は素晴らしい。『日乗上人画像』(石川・妙成寺蔵)や『日堯上人画像』(元龜三年・一五七二 本法寺蔵)など、信春時代の肖像画に顕著な硬質で清潔な描線が、ここでの毛並みの描写に見事に活かされている。デッサンにも破綻がない。とりわけ右側の遠くを見る犬の頭部に、それが見てとれるだろう。等伯自ら二匹を綿密に観察、写生した結果であることは明らかである。先行する洋犬の作例がないことも、この推定を裏付ける。むろん高価な洋犬を写生する機会が、そうあるはずもない。いや、ある。それも日常的に、と述べれば、もうお分かりだろう。そう飼えばいいのである。その愛玩するペットを描いた。『大涅槃図』に洋犬が登場した事情は、こんなところだろうか。(続く)

## ESSAY



# 近代日本画を築いた 巨匠たち

—横山大観から平山郁夫まで—

稲垣満春

近代日本画の巨匠としてその筆頭にあげられるのは横山大観ではないでしょうか。明治元年（一八六八）茨城県水戸市に生まれた大観は、東京美術学校（現在の東京藝術大学）に第一期生として入学、生涯の師と仰いだ校長の岡倉天心らの熱心な指導を受け、卒業後の明治二十九年（一八九六）には同校の助教として迎えられました。しかし、明治三十一年（一八九八）美術学校騒動で非職を命ぜられた天心とともに連袂辞職、在野の日本美術院の創立に参加。また、師天心亡き後の大正三年（一九一四）には日本美術院の再興を果たすなど、昭和三十三年（一九五八）に九十歳で亡くなるまで日本画の改革と近代化に大きな足跡を残しました。

やまと絵から琳派、水墨画などの伝統的絵画技法を継承しながらも、自由な発想に基づき新しい日本画を創造していった大観ですが、その出発点となった作品が現在展示されている『無我』です。すみれの花咲く早春の川岸。銀色に光る猫柳の花穂を背景に、大きな着物を身にまとい鼻緒のゆるい大人の草履を履いてたたずむ童子。無我とは仏教用語で悟りの境地のことをいいますが、自身の境地を純真な童子の

## EXHIBITION

姿に託し表現した大観の斬新な発想は、それまでの日本の伝統的絵画には見られないものとして当時の美術界を驚愕させました。『無我』は明治三十年の春に開催された日本絵画協会主催の第二回絵画共進会に出品（展覧会出品作は東京国立博物館が所蔵）され銅杯を受賞、二十九歳の新進気鋭の日本画家として大観の名を強く印象づけることとなりました。

水野美術館所蔵の『無我』（明治三十年）は出品作ではありませんが、三点存在する『無我』（もう一点は島根県の足立美術館が所蔵）のうちのひとつで、落款と印章から三点のなかで最後に描かれたものと思われまます。日本画の近代化を実践しようとする若き大観の斬新な感覚が伝わってきます。

本展では、横山大観の『無我』をはじめとして、下村観山、川合玉堂、菱田春草、上村松

園、伊東深水、奥田元宋、加山又造、高山辰雄、平山郁夫ら近代日本画の系譜をたどるうえで欠かすことのできない巨匠たちの名品六十点を厳選して展示しています。近代日本画では国内屈指を誇る水野美術館コレクションの名品をまとまってご覧いただけるまたとない機会です。巨匠たちの名品とともに、秋の素敵なひとときを岡崎市美術博物館でお過ごしください。



東京国立博物館所蔵《無我》



足立美術館所蔵《無我》

会期：平成24年9月1日（土）～10月21日（日）

この十一月に始まる展覧会は、テーマと内容が固まるまでに時間を要しました。それというのも、岡崎市では十一月一日から十二月二日までの一カ月間、街中を舞台にした現代アートとジャズのイベントを予定していて、そちらとの連携を図る必要があったからです。この「岡崎アート&ジャズ二〇一二」。アート部門に関しては美術博物館が企画に携わっていて——そのために現在、あつちに行ったりこつちに行ったり、二足のわらじ状態なのですが——、旧くは縄文・弥生時代から徳川江戸時代、康生町が全盛期を迎えた昭和を経て、空洞化が進む平成まで、街に堆積した時間と人々の記憶の総体を大きなテーマに取り上げています。この準備の過程で、参加していただく各作家の方と展示プランについて話すうちに、美術博物館では、それらを補足するような作品や、街中展示では知ることのできない活動を紹介したいと考えるようになりまして。ただ、今回の展覧会、当館の収蔵品を展示することが当初から課題の一つに挙がっていたため、アート&ジャズ参加作家の作品と併せて一本筋の通ったテーマをどう設定すべきか。あれこれ考え、ようやく街中展示の

テーマでもある時間性を手がかりに、移ろい行く時を示す「光陰」——そして、この言葉のもとになる、「光」と「陰」とを展示の切り口にする事で落ち着いたのでした。

前置きが長くなりましたが、「光」「陰」「時」は、どれをとっても謎に満ちていて、科学的に様々に探求されているものの、説明されても理解が及ばず、しかし根源的な存在であるがゆえに、私たちはそれらを豊かに、繊細に感受し、具体的に思索することが出来ます。だからこそ、これらの根源的テーマは、美術に携わる作家たちの心をも引きつけ、作品という形をとって、様々に表現され続けているのでしょうか。

表紙にもご紹介した平川祐樹の作品は、ロウソクが炎を湛えながら、次第に形を変えてゆく様を映像でとらえたものです。継続する時間の中で、小さな変化の連続はなかなか感知することができず、ときにそれは、私たちに根気よく見続けることを強いるかも知れません。しかし、変化はふとした瞬間に訪れ、あるいは少し前の時間を手繰り寄せたときに突如私たちは、そのロウソクの形が大きく変化していることに気づかされます。時間を体験する

## EXHIBITION

とはどういうことなのか？作品自体の持つ時間と、それを観賞し追体験する今この時間との間で、私たちは不思議な感覚にとらわれることでしょうか。あるいは、ふるかはひでたかによる、ある人の日記をジグソーパズルにおこし、それらをバラバラに解体した《日記×忘却のカタチ》と、そのパズルから抜き取ったピースを組み替えて、特別な意味を持たないものとして新たに作り直された《日記×未知のカタチ》。このシリーズ作品は、わたしたちの記憶が、如何に曖昧で不確かなものか、そして、記憶と想っていたものが如何に事後的に形成され得るものであるかをユーモアを込めて明示してくれます。ほかに、ヴェルベットを脱色し、得体の知らない不穏な影を露わにさせた染谷亜里可の「monster」シリーズや、透明樹脂を用い、作品の中に不思議な光を孕ませた山本一弥の《Desire》など、私たちの感覚的な部分に強く訴えかけてくる作品もあります。

ささやかな展覧会ですが、丁寧に作りこまれた作品を通して自己の繊細な感覚に気づきかされる、そんな時間を過ごしていただけるのではないかと思います。



染谷亜里可《monster 4》

あいちトリエンナーレ地域展開事業  
「岡崎アート&ジャズ2012」連携企画

## 光 陰

— ひかり、かげ、とき —

千葉真智子

会期：平成24年11月3日(土・祝)～2013年1月13日(日)

美術品の借用先は、美術館・博物館に限りません。作家のアトリエや、画商の倉庫、個人コレクターの自宅や企業の会議室など様々なところへ出かけていきます。そんな中、意外な組合せで驚かされたのが堂本印象展の時でした。京都の堂本印象美術館所蔵品を中心に、特に印象後年の抽象画を中心に構成した展覧会でした。伝統を重んじる寺院にも多く収蔵され、京都の大徳寺・仁和寺・東寺や醍醐寺、大阪の四天王寺や和歌山・高野山など、印象は多くの障壁画を描き続け、その数は六百面を超えると言われています。中でも齢七十歳を超えての高知・竹林寺や岐阜・乙津寺、京都の西芳寺・法然院の襖絵は抽象表現を大胆に用いたものでした。そこでサブタイトルは「創造する伝統」に決定、借用のお願いにうかがったのが京都の西芳寺でした。

西芳寺は、多くの伝承に包まれた寺で、聖徳太子の別荘跡地を行基が寺としたとか、空海の弟子で薬子の乱で皇太子を廃された高岳親王（真如）が草庵を営んだりしたとの話も伝えられています。空海、法然、

親鸞など高僧に関わる話も多いのですが、夢窓疎石作庭の庭が有名で苔寺の呼び名で知られ、特別名勝及び史跡に指定されています。学生時代に訪れた頃は観光寺院化しており、多くの人たちと行列をつくつての庭めぐりでした。今は庭の保存と宗教性維持のために申し込み制で、写経の跡に拝観とのことでした。その写経を行う本堂（西来堂）の襖絵が『遍界芳彩』『無機』『拓音充光』と題された印象作の色彩豊かな一群の抽象作品でした。借用交渉、集荷の調整が終わり帰ろうと思った時、「今日は他に予約もありませんので、庭でも見て行ってください。」一言。荒廃と復興を繰り返したこの寺の歴史と水の豊かな自然環境が織り上げた、しっとりとした緑の絨毯の間を雨音のみを道連れに小一時間、世界遺産の庭を独り占めでした。短いながら学芸員冥利に浸ったひと時でした。



西芳寺(苔寺)本堂(西来堂)内部

## COLUMN &amp; TOPIC

## 展覧会イベント報告

浦野加穂子

「徳川四天王本多忠勝と子孫たち」展では、多くの関連イベントを開催しました。主な内容をご紹介します。

◆講演会「長篠合戦図屏風に描かれた本多忠勝」(七月十四日 徳川美術館 学芸部課長 原史彦氏)

まず長篠・長久手合戦図屏風の成立についての解説があり、続いて本展に出品された徳川美術館蔵「長篠合戦図屏風」について、忠勝の姿を実物と同じ黒塗の具足で描いたものは本点のみであること、中心部に忠勝の武功をクローズアップするように描かれていること等から、本屏風の制作に本多家の関係者が関与したとみられることなどについて、熱の籠った講演が行われました。

◆講座「本多家の刀剣の魅力」(七月二日 刀剣研究家 杉浦良幸氏)

今回出品された本多家所蔵の刀剣八口及び忠勝所用の大身鎧(号蜻蛉切)について、セミナー形式での講義の後、展示室内で資料を前にして、詳細な解説がありました。参加者からは次々に質問が出され、刀剣への関心の高さが窺われました。

◆夏休み子ども教室「本多忠勝を

知ろう！」(七月二十九日・八月五日)

ワークシートを用いた子ども向けの展示解説と、レプリカ甲冑の試着体験を行いました。参加した子どもたちは、忠勝の「黒糸威胴丸具足」などを見ながら、学芸員の解説に熱心に聞き入っていました。試着体験では甲冑の変遷、各部の名称や構造の説明を受けた後、本多忠勝や榊原康政の甲冑の複製を身に着け、戦国武将の気分を味わっていました。子供用のため実際の甲冑の約半分である10kg程ですが、子供たちはその重さと暑さに驚いていました。

◆グレート家康公「葵」武将隊による演武披露(七月五日・八月九日)

当館正面入口前広場において、「葵」武将隊のうち本多忠勝・井伊直政・平岩親吉・稲姫が口上、演武、堪忍をどりを披露しました。炎天下にも関わらず、多くの観客が集まり、公演後には、武将隊とともに記念撮影や展覧会を見学していました。





## 展評

村松和明

先月、愛知県美術館で「マックス・エルンストーフィギア×スケープ」展が開催された。当館が「マックス・エルンストー驚異と魅惑の幻想宇宙」展を開催したのが二〇〇二年であったから、それから十一年が経過したことになる。今回は、当館がその間に収集したエルンストの作品約四十点も出品され、「フィギア」と「スケープ」の関係に視点を置き、作品を読み解こうとする試みがなされた。

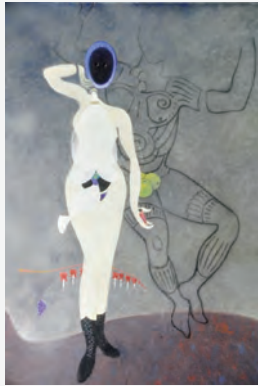
たしかにエルンストは、彼が内なる自我とする鳥類の王ロプロを「フィギア」として画面に登場させ、またその姿を変じさせて荒涼たる森の「スケープ」に置きもした。今回はそれらの象徴ともいえる重要な作品が出品されていた。《美しい女庭師の帰還》(一九六七年)である。本作はナチスの「退廃芸術展」に展示された後、消失してしまった《美しい女庭師》(一九三三年)を、それから三十年後にエルンスト自身が再制作したものである。彼が真に表現しようとしたものは、再制作まで取り戻さねばならなかったこの作品の中にあるのではないか。女庭師とは「イヴ」であり、失われた楽園をよ

### 「マックス・エルンスト フィギア×スケープ」展

みがえらせる存在として暗喩されたものとされる。つまりここに込められているのは、失われた楽園の復活、自然への畏敬、鳥に託された無原罪の御宿り、聖なるものへの転化と原初的なものへの回帰、といった諸要素である。

エルンストは『シュルレアリスム宣言』の結語となつている「生は別のところにある」という言葉にもつながる「真の人生」(ランボーの言葉)を求めることを、この絵を自ら帰還させることによつて、今一度、その具現化を試みたのではなかったか。

エルンストの作品をあらためて「フィギア」と「スケープ」という視点で追いつながら、本作を最後に置いたことで、今回のエルンスト展の意義は十分に伝えられたように思われる。



《美しい女庭師の帰還》1967年  
メニル・コレクション

## COLUMN & TOPIC

### 岡崎アート&ジャズ二〇二二

千葉真智子

「岡崎アート&ジャズ二〇二二」。前号でもご紹介したように、岡崎の街中を舞台に一ヶ月にわたり実施されるアートとジャズのイベントが、いよいよヶ月後に近づいてきました。岡崎の街中で現代アートの展示を行うのは初めてのことで、あいちトリエンナーレ二〇二三を来年に控え、その前哨戦あるいは予行練習といったところでしょうか。街の皆さんが不安に感じることがないように、うまく協力していけたらと思うのですが、なかなかそうしたコミュニケーションに力が及ばず、街中に出ることに難しさを実感したりします。しかし、メイン会場となる岡崎シビックビル管理会社の担当の方々が本場に親身に協力してくださったり、商店街の方が有志で街中の案内看板を作ろうと提案してくださったり、大いに助けられながら準備をしている状況です。

参加作家の方々も、これから本格的に会場での作品制作に突入します。みなさん会場を見られ、それぞれ場所にアプローチした作品を構想・妄想(?)してくださいって

て、非常に楽しみです。会期中は毎週末のようにイベントも予定していて、アートを楽しんでいただきたいのはもちろんですが、岡崎の街自体を、再発見・再認識していただける機会になればと思っています。

街を歩くのは億劫だと思われるかもしれませんが。しかし、先日用事があつて某ショッピングモールに行つたのですが、端から端まで相当な距離があり、雨に濡れず快適ではあるものの、康生の町の方がコンパクトに歩くことができ、外の空気や光りや匂いを感じられて新鮮なのではないかと思つたりしました。

まだまだ日ざしが暖かい十一月、是非、美術博物館とあわせて街中展示ご覧いただき、岡崎の美味しい食事や甘味も堪能していただければと思います。



# INFORMATION

水野美術館コレクション名品展

## 近代日本画を築いた巨匠たち ～横山大観から平山郁夫まで～

9月1日(土)～10月21日(日)

■学芸員による展示説明会

10月8日(月・祝) 午後2時から

あいちトリエンナーレ地域展開事業「岡崎アート&ジャズ2012」連携企画

## 光陰 ―ひかり、かげ、とき―

11月3日(土・祝)～1月13日(日)

■学芸員による展示説明会

12月16日(日)、1月6日(日) ※いずれも午後2時から

■ワークショップ

11月18日(日)「〈妄想の空間〉を連結しよう D.D.プロジェクト」

D.D.(今村哲+染谷亜里可)

定員50名 参加無料

頭の中で妄想している空間を、もし、実現するとしたら。そのはじめての一步としてのワークショップ。

※申込方法・内容詳細については岡崎アート&ジャズ2012情報ページ

<http://okzartjazz.com/> Twitter@OKZArtJazzをご覧ください。

## 《やさしいミュージアム講座の受講者募集》

市民の方々に歴史や美術をより身近に感じていただけるよう、11月～平成25年3月の毎月1度、連続講座「やさしいミュージアム講座(岡崎・中世の城と館を探ろう!)」(日本画を愉しむために)の2講座を開催します。

■岡崎・中世の城と館を探ろう!

11月～平成25年3月の毎月第2水曜日 9:30～12:00(全4回)

岡崎市内の中世の城と館を巡り、中世の地域社会とその周辺を探ります。

奥田敏春(岡崎市文化財保護審議会委員・愛知中世城郭研究会)

※1月は休講、11月は第3水曜日に変更します。

定員30名 集合場所/美術博物館駐車場(現地バス移動)

※初回のみ当館1階セミナールーム

■日本画を愉しむために

11月～平成25年3月の毎月第3金曜日 14:00～15:30(全4回)

日本画の愉しみ方を、当館館長が4つのテーマに沿ってお話します。

榊原悟(当館館長) ※1月は休講、2月は第4金曜日に変更します。

定員50名 当館1階セミナールーム

《共通》 □参加費/無料 □申込方法/往復ハガキに、希望講座名(ハガキ1枚につき1講座の申込)・郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記の上、10月19日(金)までに下記へお申し込みください。※各講座4回全て参加できる方のみ応募ください。※ハガキ1枚につき1人の申込に限ります。※応募多数の場合は抽選となります。

□申込先/〒444-0002 岡崎市高隆寺町字畔1番地 岡崎中央総合公園内 岡崎市美術博物館「やさしいミュージアム講座」係

## 思いつきなくらし

暮らしの中で、思いつきから何か始めてみるのも楽しいものです。

少し前の自宅での私の部屋は、お気に入りたちが無造作に積みまわ、傍目からは雑然としていたでしょう。そこで思いつき…鋸・金鋸と本を片手に始まる楽しいDIYの日々。そして今では完成したその家具?にお気に入りたちは落ち着き、私は夜な夜な自分の時間を楽しんでいるのです。

さて、そのお気に入りたちを見渡せば片隅で二際光るモノ。今ではインテリアのsaxophone。これも立派な思いつきのカケラです。夏の夜出掛けたこぢんまりとしたstateの「月空Live」。癒しの空間でやわらかく響くSaxの音色に魅了され、そしてまた思いつき。しかし、楽器は思いつき価格でない現実ながら数カ月後には、Saxの片手に教室に通う私でした。騒音?のレベルから、きらきら星〜ムーンリバーへ。1曲ごとの息切れには苦笑い。しかしながら二年半。すっかり楽しんだのを思い出します。コレも思いつきから始まる素敵なきっかけで、宝物です。

季節は秋。芸術・スポーツ・食欲の季節。この秋は更に閃く、思いつき。に期待しながら暮らしを楽しくする工夫はまだまだ尽きません。(陸)

## おしゃべり、あれこれ。

## くらはし・かん

この夏、学生時代の友人から、忘れかけていた人物の消息を知らされた。しかも漫画家であり、小説家デビューも果たしたという。その人物は倉橋寛。『赤き奔河の如く』『風媒社』が彼の作品。壬申の乱を題材にした歴史小説である。ドラゴンズファンの方であれば、中日スポーツ連載「おれたちやドラゴンズ」の4コマ漫画をご存じだろうか。作者くらはし・かん、その人である。驚いた。在学中の彼のイメージと全く結びつかない。(こめんなさい)

調べてみると地元江南市では講演会なども行っており、多方面にご活躍の様子。彼とは短期間ではあったが、実はサークルでフォークデュオを組んでいた。当時はエレキギターの方が圧倒的人気で、フォークギターをやるという者は少数派。確か彼は正やんファンだった。彼のHPには今もギター抱えて歌う姿があり、変わらぬ風貌と歌い続けていることに、懐かしさと何とも言いがたい嬉しさいっぱいである。

図書館で借りて済ませようと思つた『赤き奔河の如く』は軽く読み飛ばせるような内容ではなかった。購入し、じっくりと読ませてもらうことにした。彼の語り口が聞こえてきそうで、私にとっては楽しみな一冊である。(伊)

編集後記 | 暑かった夏も終わり、秋風を感じるようになりました。水野美術館展は大変好評で、横山大観はじめ「大家」と称される作家たちの吸引力を今さらながら認識させられます。次回展覧会でご紹介するのは、現在活躍中の作家たちによる作品です。この作品たちも、何れは歴史のなかに位置づけられていくことになるものです。今の私たちが大観を見るように、後の世の人たちも、私たちの時代の作品を見ることになるのでしょうか。(千葉)

表紙図版：平川祐樹《A Candle》2012年 Photo/courtesy the artist



岡崎市美術館

開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第54号 2012年10月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町畔1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA